

■50代の再就職は…。

彼は五十五歳。三十年間勤めていた会社の早期退職者制度に応募して会社を辞めた。

・・・

彼の場合は違う。勤めていた会社の早期退職者制度は、近い将来の経営不安を前提としたものではなく、会社としては、これ以上の昇格は望めない社員が、独立や転職を考えるための条件づくりという意味合いの制度だった。

・・・

しかし、退社してみて、彼は現実の厳しさをいやというほど味わうことになる。たしかに住宅ローンはなくなった。だが、定収入もない。また、住民税や国民年金、国民健康保険やらの出費で、二年くらいは暮らせると思っていた退職金も一年と持たずに底をつく。すぐ見つかるかとタカをくくっていた仕事も、なかなか見つからない。

・・・

「五十歳を過ぎたサラリーマンは会社にしがみつけ」

これが私の基本的な考え方だ。持続的で確実な収入の道が得られない人間は、間違っても会社を辞めてはいけない。すぐお金になる特別に優れた技術や才能を持っている人間以外は、絶対に会社を辞めてはいけないのだ。

流行りの社会保険労務士などの資格は、ほとんど役に立たない。ほとんどの資格は「足の裏についたゴハン粒」だ。とっとも食えないのである。むしろ資格をとるなら、ボイラー技士などブルーカラー系のほうがまだいい。

・・・

私のまわりにいる人間で、五十歳を過ぎてから独立や転職をして、以前よりも幸せな人間は一人もいない。彼らの選択のもっとも大きな過ちは、会社勤めのマイナス面ばかりを拡大解釈して、安易に決断してしまったことだろう。

たしかに会社勤めはいやなことが多い。だが、ここは冷静に考えなければダメだ。誰もが認める希少な才能に恵まれた人間以外は、五十歳を過ぎて、会社を辞めようなどと考えるてはいけない。

■境遇は二極分化する…。

「五十代の方は、若者以上に、勝ち組と負け組の差が出ていますね。ハイキャリアの方は引く手あまた。しかも年代なりのスキルを持っている。そうすると、それこそ年収一〇〇〇万円クラスでも欲しがります。彼らは自己アピールもうまい。形は再就職でも、迎える側は三顧の礼を尽くして受け入れてくれます。しかし、自分の実績をアピールできない人は、本当に職がないのが現実です。そういう人というのは、相談窓口に来ると皆、同じことをいうんです『高望みはしません』と。そして、いまよりもはるかに低い待遇の求人票ばかり持ってくるんです」

■夫婦関係は…。

もともと、夫婦はお互いに理解しあえるとは思わないことだ。男と女が理解しあうのは、基本的に難しいのである。しよせん夫婦は他人、といって愛情がないわけではない。くつつきすぎず、離れすぎず——これが夫婦円満のコツでもある。

■自分も持っているものを品定めされる

ヤクザの世界では「貫目(かんめ)を量る」という言葉がよく使われる。格、キャリア、度量などで、相手が自分よりも上か下かを見定めることをいう。一方的に相手に見下されているは生きていけないこの業界では、大切な処世術なのだろう。